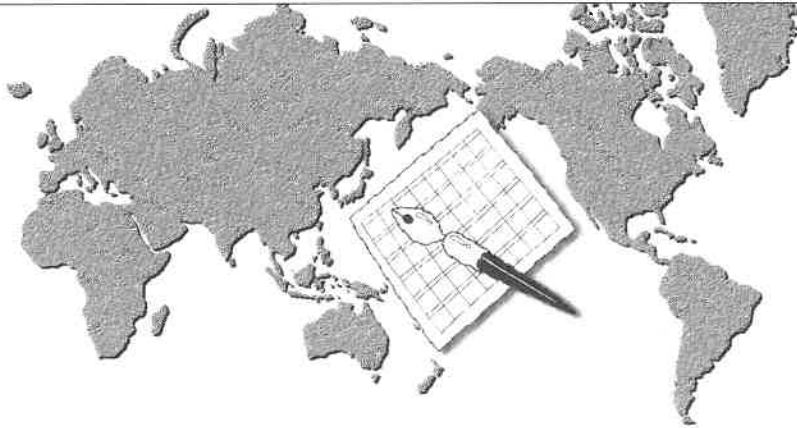


日本医師会雑誌 第139巻・第9号/平成22年12月掲載

「わが旅」

— わが旅 —



山形大学外科学第一講座 主任教授

木村 理



わが旅

山形大学外科学第一講座
主任教授

木村 わたる
きむら わたる

最近では、日本国内は日帰り、韓国は一泊、などというビジネス旅行が多い。移動の時間は極力体力の消耗を避けるようにし、できれば移動時間に論文を書き、書類に目を通し、さらにはその移動から帰ってもすぐに仕事ができるようにしている。すなわちこれらは旅でも旅行でもなく、移動である。

そういう意味では学会はどこで行われても同じで、移動の疲れのみがそのあとの身体への負担として残ることになる。アルゼンチンで行われた国際学会では三日間のほとんどがホテルに缶詰で、わずかに徒歩十分の大統領府の周辺を歩いてまわっただけであった。そのようなものでもその日の学会が終わって近くに出て医局員と食べる食事などは、その土地の旅情を感じさせるものである。これまで若い頃に旅とよばれることをしたことは多くある。学生のときは二カ月間、同級生とヨーロッパの夏を旅した。背負子と寝袋を背

負い、五人が計画もなく別々のところを旅し、一週間後から三週間後にまたいったことない場所で再び合うことを決めて旅をする。再会して数日間また一緒に行動し、また一人一人になって別の地へ向かうのだが新鮮であった。怖いもの知らずで、宿泊費を浮かすためになるべく夜行列車で移動していた。六十日のうち約二十夜を列車内で過ごした。ヨーロッパの列車はコンパートメントになっていて、すいていと横になって眠りやすいのである。空調がいいので、このときは寝袋は枕になる。ふらふらになりながら、翌朝、新しい街で旅を続けるといふ、楽しい時間を過ごした。一日に千円以下しか使わない(Europe: 10 dollars a day)と決めていた早稲田の学生と知り合い、数日間一緒にスウェーデンをまわったこともあったが、お腹は減り、のどは乾き、きびしかった思い出もある。ユースホステルが満員で、白夜の中で庭においてあった壊れた

ソファの上で寝ていたら翌朝ゴミ回収車にいっしょに回収されそうになったこともある。

富士山に同級生と登り、山小屋に泊まるつもりで軽装であったが、どういふ訳か道に迷って、テントもななく富士山中腹に一泊したこともあった。富士吉田駅から歩いたのだが、夕方雨に降られていたこともあり、真夜中には寒くて命の危険も感じた。同級生は流れ星を数えながら落ち着いたものであった。私も流れ星がこんなになくさん落ちてくるものだとして知った。恋の痛手をいやすために中山道に一人旅にでてみたこともあった。大学に入ったばかりの時に、友人二人と夜行列車に揺られて大垣をへて京都まで行き、京都・奈良を中学・高校時代の修学旅行とまったくちがった独自の見方でみて十分堪能した。さらに続けて和田湖に一人でいって受験の疲れをいやしたこともあった。いずれも学生時代の話であるが、忘れがたい思い出である。

結婚してからは少しはまともな「旅行」になった。外国はできるだけみてまわるようにし、医師になって六、八年後の研究時代には韓国、台湾、中国という近隣の土地も旅し、歴史、文化を知った。この体験や知識はその後の人生に影響を与えた。